

I 『比較経済論講義—市場経済化の理論と実証』（日本評論社）のご紹介

この夏、日本評論社より『比較経済論講義—市場経済化の理論と実証』が出版されました（写真1）。本書は、編著者である岩崎一郎教授を研究代表者とする平成23-26年度科学研究費補助金基盤研究（A）「比較移行経済論の確立：市場経済化20年史のメタ分析」をもとにした研究成果です。私も共同研究者として参画し、過去7年間に亘る共同研究活動の諸成果をベースに、学部上級生や大学院生の中・上級教科書として編纂されたものです。

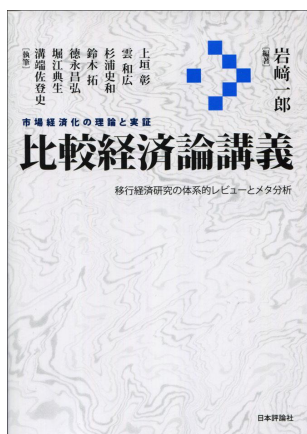


写真1. 岩崎編著『比較経済論講義』（日本評論社）

本書の特徴は、移行経済研究において過去どのような論争が展開されてきたのか、どのような研究成果が蓄積されてきたのか、その結果、どのような結論や共通認識が得られてきたのかを、体系的レビューないしはメタ分析の手法を用いて明らかにしたことです。従来の経済学分野の研究で一般的である「記述的レビュー」とは異なり、計量的・数理統計的手法を駆使した「体系的レビュー」、特のその中でも「メタ分析」により、より高い精度と客観性、再現可能性を担保した分析が可能になります。本書は、それを移行経済研究分野において試みた我が国においても世界においても希少な野心的研究の成果であると言えます。

手法が斬新であったがゆえに、こうした手法を理解し、実践することに共同研究者一同、様々な苦心がありました。本書を手にとっただけであれば、それをご理解いただけるでしょう。また、こうした手法には賛否両論があるものの、本書は移行経済においてどのような議論が展開されてきたかを探る格好の参考書になっていると思います。みなさまから忌憚のないご意見やフィードバックを頂ければ幸いです。（文責：堀江典生）

II UiT ノルウェー北極大学との国際交流報告

2018年6月5日から11日にかけて、本学の大学院生とUiT ノルウェー北極大学（以下UiT）の大学院生が交流を行うイベントが立山と富山大学で開催されました。今回、UiT から教員3名と大学院生7名が来日されました。ニューズレター24号で紹介しました国際教育プログラムに関連して、今年度は本プログラムを日本で実施するため、UiT 御一行はまず国立極地研究所を訪れた後、岐阜大学流域圏科学研究センター高山試験地にて森林生態学に関する野外実習を行いました。その後、立山室堂山荘に3泊し、日本の高山生態系や高山植物の生態を学ぶ野外実習を日本の大学院に所属する学生4名と一緒に学びました。立山では、日中は残雪の多い野外にて調査を行い（写真2左上）、夕方に山荘に戻りデータを解析し、夕食後には山荘内で結果を報告する（写真2右上）という過密スケジュールでした。



写真2. UiT との国際交流プログラム。立山野外実習（左上）、山荘での実習結果報告会（右上）、富山大学でのワークショップ（下左）、交流会（下右）（撮影：和田）。

野外実習の最終日は、下山後に立山博物館を見学し、立山信仰の歴史を学びました。休日を挟んだ6月11日、本学にてワークショップを開催しました。ワークショップでは、午前の講演、午後のグループディスカッション（写真2下左）を通して日本や富山の山岳生態系についてその機能や多様性を学ぶと同時に、北東アジアにおける森林資源の持続的な利用について、両国の比較を通じて考えていきました。ワークショップ終了後は、五福キャンパス内のカフェ「AZAMI」にて、交流会を実施しました（写真2下右）。緊張が解れ学生同士の会話も進みました。教育の国際化を進めるためにも今後もこのような取り組みを行なっていきたいと思います。（文責：和田直也）

III 6th WCERE に参加して

現在、科研費にて取り組んでいる研究課題の成果を報告するために、2018年6月末にスウェーデンのイエーテボリで開催された第6回環境・資源経済学会世界大会に参加しました。この世界大会は、アメリカ、ヨーロッパおよびアジアの環境経済学の学会が共催で行なっているもので、四年に一度開催されています。

プログラムだけで200ページほどになる大きな学会であるため、その全てに参加することはできませんが、そのタイトルを眺めるだけでも世界の研究の潮流を感じることができると思いました。想像はしていましたが、やはりエネルギーに関する研究が多く、世界中で関心が高いことがわかりました。また、意外だったのは漁業資源に関するセッションが多かったことです。これは北欧開催という土地柄があったからかもしれません。



写真3. 公式レセプションにて (撮影：山本).

北欧的だった点として特筆したいのは、写真3にある1,000人を超える規模の大人数で開催された公式ディナーでのメイン料理が、長めにカットしたキャベツをゆでた「ステーキ」だったことです。牛肉に比べてCO₂排出量が少ないということで選ばれたそうですが、少々ご不満の方もいたようで、ディナー終了後にバーガーキングへ行ったという参加者もいました。

イエーテボリに限らずスウェーデンは公共交通が発達していることが特徴ですが、市街地についていえば、富山市も負けていないとあらためて思いました。ただし、最も大きな違いは専用レーンも含めて、自転車^{わだち}が市民の足として広く活用されていた点でした。インフラ整備のあり方も含めて新しい視点を得ることができた気がします。

(文責：山本雅資)

IV 地域研究四方山話 (21) : 極東ロシアでの野外調査 (その1)

筆者は毎夏10日間ほど極東ロシアのアムール州ゼーヤ市にある自然保護区へ野外調査に出かけています。今回は、この野外調査で重要なこと二つを紹介したいと思います。

一つ目は焚き火です。野外調査のため、獣道を

1日かけて登山することもあります。テントを張れる場所に着く頃には、もう辺りは薄暗くなっています。早く火を起こして夕食の準備をしないとイケません。こんな時、ロシアの方々は実に素早く火を起こしてくれます(写真4)。周りから集めた小枝を内側に螺旋状に組んでいき、次第に大きめの枝を外に配置していきます。空間のある中心部に、着火剤としてダケカンバの樹皮を入れ、マッチで樹皮に火をつけると「バチバチ」と音を立てながら、火が樹皮から小枝、中枝、そして外側の太枝へと移っていきます(写真4)。



写真4. カラマツやハイマツの枝を使った焚き火 (撮影：和田).

雨天時でも実に素早く火を起こしてしまうロシア人の焚き火の技術は本当に素晴らしいです。

二つ目に紹介したいのが、調査時に自然保護区内を移動する際に乗車させて頂いている自動車ウァズ(UAZ)です(写真5)。ロシア語では、УАЗと表記され、これはウリヤノフスク自動車工場(Ульяновский Автомобильный Завод)の略語です。キャブオーバー型バンタイプのUAZ-452は、1960年代に開発された軍用車両/汎用自動車で、現在も生産が続けられているUAZの主力製品となっています。このUAZ、無舗装の凹凸の多い悪路もぬかるみの多い林道もなんのその、独特なサスペンションの足回りでクールに走破していきます。このUAZをもってしても、昨年は鋭利な石の角を踏んでパンク(写真5右)、そして今年^{わだち}はえぐれた轍にはまってしまい動けなくなってしまいました。予定通りに行かないのが野外調査の常、それでも頼りになる相棒UAZを足に来年の調査も頑張りたいと思います。(文責：和田直也)



写真5. ゼイスキー自然保護区所有のUAZ(左)と2017年調査時における後輪のパンク(右) (撮影：和田).

【追記】

この9月をもち、北東アジア研究プロジェクトでご活躍頂いた伊藤岳研究員が本センターを離れます。新しい環境での益々のご発展を祈念しております(教員一同)。